

## 資料

『日本家政学会誌』における食文化関連論文の分析  
—『風俗』、『生活学』との比較を通して—

桑畑 美沙子

(熊本大学教育学部)

原稿受付平成10年2月25日；原稿受理平成11年5月13日

Papers Concerned with Culture of Dietary Habits in "Journal of Home Economics of Japan," "Historical Review on Manners and Customs," and "Seikatsugaku"

Misako KUWAHATA

Faculty of Education, Kumamoto University, Kumamoto 860-8555

The aim of the present study is to examine the characteristics of the content of papers concerned with the culture of dietary habits, in "Journal of Home Economics of Japan," "Historical Review on Manners and Customs," and "Seikatsugaku" (Journal of Life Style of Japan). There were 115 papers in "Journal of Home Economics of Japan," 76 papers in "Historical Review on Manners and Customs," and 41 papers in "Seikatsugaku."

The findings were as follows:

- 1) The rate of papers concerned with the culture of dietary habits to all papers was lower in "Journal of Home Economics of Japan" than the other Journals. The rate of date in "Journal of Home Economics of Japan" was higher than that of originals.
- 2) For the dietary behavior, the rate of the papers in "Journal of Home Economics of Japan" was higher, too.
- 3) There were more papers in "Journal of Home Economics of Japan," which were studied on the culture of dietary habits of the contemporary period, the cities in Japan, and the middle class.
- 4) In "Journal of Home Economics of Japan," there was higher rate of papers using questionnaire and statistical analysis, than in the other Journals. In particular, the rate of original papers was remarkably high.
- 5) We should expand the period, area, and class as the subjects for the study of the culture of dietary habits, and use not only quantitative method but also qualitative method in "Journal of Home Economics of Japan."

(Received February 25, 1998; Accepted in revised form May 13, 1999)

**Keywords:** culture of dietary habits 食文化, papers concerned with the culture of dietary habits 食文化関連論文, Journal of Home Economics of Japan 日本家政学会誌.

## 1. 緒言

近年、食文化という言葉が、出版物はもちろん、食べ歩きツアーや食品宣伝など、各種企画で多用されている。今井（1996）によると、1970年代のはじめごろ、先駆的な研究者によって食を文化の問題として人文科学の対象に取り上げようとする動きが起こり、

1980年代に食文化という言葉が定着したようであるという。

日本家政学会（以下、家政学会と略す）の場合、食物領域は、長い間、栄養学、食品学、調理学が3本の柱とされて研究されてきた（杉田 1988）。近年、それらに加えて食べるという生活行為自体にかかわる研究

が行われるようになってきている。そして、1992年以降、学会の年次大会における研究発表の柱として、食物分野の中に文化という枠組みが設けられてもいる。これは、家政学が人間の生活そのものを対象とする以上、食物領域も人間生活とのかかわりを視座において、食をいわば単なるモノや技術の側面だけでなく総合的にとらえて研究されるべきという提言（稲垣 1979；杉田 1988）が受け止められたからであろう。さらに、食文化研究の充実・発展を目的として食文化研究部会が設置された（石川 1988；石川 1998）からでもあろう。

では、このような動きは、『日本家政学会誌』（以下、『家政誌』と略す）に、どう反映されているのであろうか。そこで、『家政誌』に掲載された、食文化にかかわる研究がなされたと思われる論文（以下、食文化関連論文と略す）の掲載状態、研究の内容・対象・手法を検討した。さらに、①「人々の生活史である風俗」<sup>\*1</sup>という観点から研究がなされている日本風俗史学会（以下、風俗史学会と略す）、②「生活学という観点から生活を客体化し、理論化しよう」と<sup>\*2</sup>研究されている日本生活学会（以下、生活学会と略す）の学会誌である『風俗』と『生活学』から食文化関連論文を検索し、『家政誌』の論文と比較検討した。その結果、『家政誌』における食文化研究の特徴が明らかとなり、課題が示唆されたので報告する。なお、『風俗』と『生活学』を比較の対象としたのは、家政学会における①食文化研究部会の母体が石川等によって行われていた食物史に関するゼミであり（石川

1988；石川 1998）、②食文化研究が先に述べたように稲垣や杉田等の提案に応える試みとして取り組まれたと推察されることから、③『家政誌』の食文化関連論文は、食の風俗が史的に研究されている風俗史学会と、生活という観点から食が総合的に研究されている生活学会の学会誌の食文化関連論文と影響しあっている可能性があるのでは、と考えたからである。

## 2. 研究方法

### (1) 食文化の概念

先に述べたように、食文化という言葉は社会的に汎用されているものの、現時点において定義が明確にされているとは言いがたく、言葉だけが先行している感が否めない（今井 1996）。このような状況をふまえ、本研究では、石毛（1981, 1982, 1989）、杉田（1985）、豊川（1984）、米川と馬路（1990）、石川（1995）等の論考を参考し、食文化を「人間が自然や社会に対処しながら蓄積し、蓄積している食に関する行動様式の総体」と考えることにした。

### (2) 分析対象

まず、『家政誌』の1～46巻、『風俗』の1～122巻、および『生活学』の1～20巻に掲載されていた論文の表題から食文化関連論文と思われる論文を取り出し、内容を検討して分析対象の食文化関連論文を確定した。分析対象と確定された食文化関連論文は、『家政誌』が115編、『風俗』が76編、『生活学』が41編、計232編である。

なお、本研究の食文化関連論文は、先ほどの食文化の概念にかかわって研究されたと著者が判断した論文である。これは、先に述べたように、①食文化という言葉の定義が明確にされているとは言いがたく、②食を文化という視点でとらえた研究が本格的に取り組まれたのが近年であるという状況から、食文化というキーワードで分析対象の論文を確定することは困難と考えたからである。つまり、本研究の分析対象は、①人間がより望ましい食生活を営むために工夫・努力してきた、食べものの調達・調理加工・喫食・片付けという一連の行為と、②それらの行為に必要な技術・道具・施設、経費、③その背景にある思想・心理、④以上のこととかかわりのある教育・伝承などについて研究されたと著者がとらえた論文である。したがって、分析対象の論文はいわゆる食物領域の論文だけでなく、住居、家庭経済、家庭経営などの領域の論文も含まれている。台所などの施設・設備、食費、食に

<sup>\*1</sup> 日本風俗史学会のしおりより引用。しおりには、さらに「人々の生活文化の表現である『風俗』を歴史的に研究するには、従来のように歴史学の中の小さな分野に閉じこもっては不可能です。そのためには歴史学を中心に、それと関連する各分野の研究者の連帯を強化し、情報交換を充分に行って、時には共同で研究できるような連絡組織を……。日本風俗史学会は、このような風俗史の研究者のための全国的な組織として結成されました」とある。1960年に設立され、1998年4月現在、約570人の正会員を擁している。

<sup>\*2</sup> 学会設立趣意書に「生活の中で人間を発見し、人間を通して、生活を見つめ、そのことによって、人間にとっての『生きる』ことの意味を探求すること—それが『生活学』の立場である」とあり、住居学の研究者が中心となって生活を総合的に研究する観点から1972年に設立された学会である。1998年4月現在、約600人の正会員を擁している。

## 『日本家政学会誌』における食文化関連論文の分析

かかわる家事労働などに関して研究されていると思われる場合、食文化関連論文としたからである。

## (3) 検討項目

『家政誌』、『風俗』、および『生活学』における食文化関連論文について、①掲載状態、②研究された内容、③研究対象とされた時代、地域、階層、およびそれらが選定された際の視角の明確さ、④統計的な処理を含む研究手法を、以下のように区分して集計し検討した。その際、掲載状態、視角の明確さ、統計的な処理の有無に関して尤度比検定を行った(篠原1989)。

なお、本研究の分析に用いた論文は、それぞれの著者が各自の問題意識から取り組んだ研究の成果であり、本研究における分析の枠組みにそって食文化が研究されたものではない。そのため、対象論文は本研究の枠組みに全面的に対応しているとは限らず、集計において一つ、あるいは複数の区分に該当していることとなる。それで、視角の明確さと、統計的な処理の有無を除いて、ダブルカウント方式で集計してある。さらに、ダブルカウント方式で集計した項目は各区分が独立していないので統計的処理は行っていない(篠原1989)。

## 3. 結果および考察

## (1) 食文化関連論文の掲載状態

表1に、食文化関連論文数と全掲載論文数に占める割合を年代別に示した。なお、本研究では、年代を1951~1959年、1960~1969年、1970~1979年、1980~1989年、1990~1995年の5期に区分してある(以下、それぞれⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期、Ⅳ期、Ⅴ期と記す)。この時代区分では、Ⅰ期が9年間、Ⅴ期が6年間で等分割になっていない。これは、『家政誌』の発刊が1951

年であることと、本研究で分析に着手した時期が1996年4月であったためである。Ⅰ期はともかく、Ⅴ期に関しては検討の対象から省くのが適当とも考えられるが、最近の食文化研究も含めて検討したいと考えて分析対象に加えることにした。このことを示すため、表ではⅣ期とⅤ期の間に破線が入れている。また、『家政誌』の論文は、報文、ノート、資料、総説、学会賞受賞記念論文などに区分されている。食文化関連論文は報文とノートと資料に見いだされ、総説、学会賞受賞記念論文には見いだされなかった。ノートとして掲載された食文化関連論文はⅣ期とⅤ期に各1編ずつ、計2編と、極めて些少であった。そのため、これらについては表中に示さず、以下での検討も割愛する。

表より、食文化関連論文数は『家政誌』113編、『風俗』76編、『生活学』41編で、『家政誌』は他の2誌に比べて多かった。全掲載論文数に占める割合は『家政誌』が3.1%、『風俗』が19.0%、『生活学』が25.2%で、『家政誌』は他の2誌に比べて低かった( $p < 0.01$ )。

また、家政誌の食文化関連論文の論文数は報文81編、資料32編で、報文が多く、全掲載論文に占める割合は報文2.3%、資料14.3%で、資料の割合が高かった( $p < 0.01$ )。

家政学会は、「自然・社会・人文の諸科学の方法」(田辺1979)を駆使して、「食物学、被服学、住居学、児童学などの分科から成る」家政学(加藤1998)を研究する学会である。正会員は約5,000人(大野1998)で、風俗史学会や生活学会に比べ学会員数が多く、会員の専門は多岐にわたっている。一方、食文化研究部会は、現在、発足して10年余が経過し、部会員数約200名に過ぎない。しかも、『家政誌』の論文

表1. 食文化関連論文数と、全掲載論文数に占める割合

年代	家 政 誌 (編(%))					風 俗 (編(%))		生活学 (編(%))		
	報 文		資 料		計		全掲載論文	食文化 関連論文	全掲載論文	食文化 関連論文
	全掲載論文	食文化 関連論文	全掲載論文	食文化 関連論文	全掲載論文	食文化 関連論文				
'51~59	383(100.0)	20(5.2)	1(100.0)	—	384(100.0)	20(5.2)	—	—	—	—
'60~69	868(100.0)	13(1.5)	17(100.0)	—	885(100.0)	13(1.5)	90(100.0)	11(12.2)	—	—
'70~79	809(100.0)	6(0.7)	47(100.0)	3(6.4)	856(100.0)	9(1.1)	122(100.0)	33(27.0)	45(100.0)	9(20.0)
'80~89	883(100.0)	20(2.3)	116(100.0)	22(19.0)	999(100.0)	42(4.2)	138(100.0)	26(18.8)	71(100.0)	24(33.8)
'90~95	522(100.0)	22(4.2)	43(100.0)	7(16.3)	565(100.0)	29(5.1)	49(100.0)	6(12.2)	47(100.0)	8(17.0)
合計	3,465(100.0)	81(2.3)**	224(100.0)	32(14.3)**	3,689(100.0)	113(3.1)	399(100.0)	76(19.0)**	163(100.0)	41(25.2)**

—:掲載論文なし。\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , 自由度:3.

は、自然科学的手法による研究が80%近くを占めている(佐藤 1991) ことからわかるように、自然科学的研究に傾斜している傾向にある。これらのことを勘案すると、『家政誌』で食文化関連論文の占める割合が低い結果となったことはうなずける。しかし、①『家政誌』の報文は、1951年の発刊以来1989年まで、食物領域の論文が半数近くを占め(佐藤 1991)、②先に述べたように、本研究の食文化関連論文は食物だけでなく、住居、家庭経済、家庭経営などの領域の論文も含まれ、③家政学における食物学が、普遍的論理をもつサイエンスとしての側面と、多面的な価値観も許容する文化の学としての性格ももつ(川端 1998)と位置づけられるならば、食文化関連論文の割合が3.1%であることは注視されてしかるべきと言えよう。

また、『家政誌』において、資料という形式の論文は1951年から掲載され、全掲載論文に占める割合は1995年までで5.7%であった。一方、資料としての食文化関連論文は70年代から掲載され、『家政誌』に掲載された全食文化関連論文の27.8%を占めていた。これらの割合を比べると、後者は前者より有意に低かった( $p < 0.01$ )。先に述べたように、報文と資料別に食文化関連論文の割合をみても、報文が低く資料が高かった。このことから、『家政誌』において、食文化関連論文は資料として掲載されている傾向にあると言えよう。

以上のことから、『家政誌』の食文化関連論文は、①他誌に比べ、論文数は多いが、全掲載論文数に占める割合が低く、②特に報文でなく資料として掲載されている論文の割合が高い現状から、③報文としてより、資料として掲載される傾向にあると推察されよう。

なお、表1からわかるように、報文、資料、『風俗』、『生活学』のいずれも年代ごとの論文数は少ないので、以下、年代ごとの検討は割愛する。

## (2) 研究内容

食文化の研究内容を、①食べものの生産から廃棄までの食行動、②食にかかわる経済や教育・伝承、③食行動にかかわる施設や食器・食具、④食べものや食行動にかかわる意識・思想などの四つに区分して集計した結果を、図1に示した。図では、①より④を、それぞれ、①食行動、②経済・教育・伝承、③食器・食具、④意識・思想と略して示してある。

図より、報文、資料、および『風俗』のすべて、『生活学』のほとんどの論文で、食べものの生産から

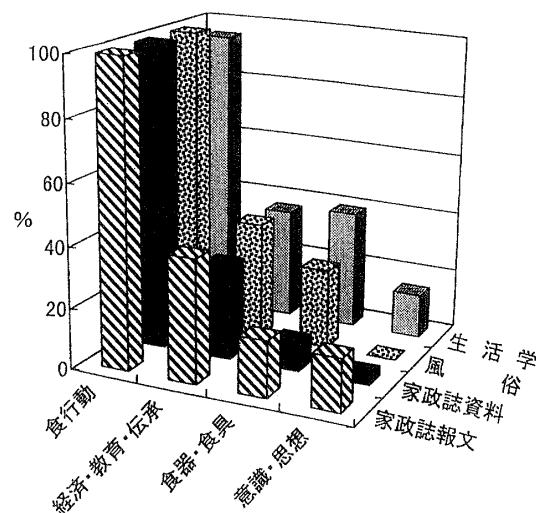


図1. 研究された内容

■: 家政誌報文, ■: 家政誌資料, □: 風俗, □: 生活学.

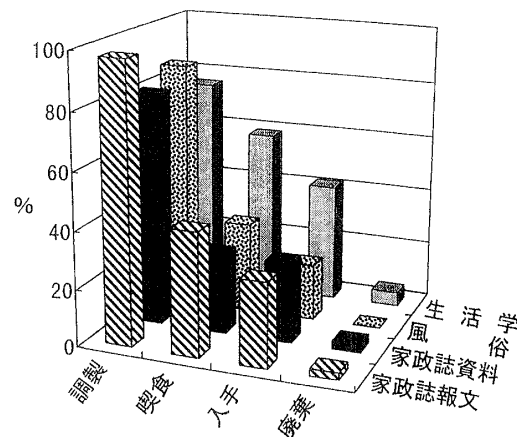


図2. 研究された食行動の内容

■: 家政誌報文, ■: 家政誌資料, □: 風俗, □: 生活学.

廃棄までの食行動が研究されていた。次に多く研究されている内容は、報文、資料、および『風俗』が経済・教育・伝承、『生活学』は食器・食具であった。食べものや食行動にかかわる意識・思想に関する論文は、資料で僅少、『風俗』で皆無であった。

ところで、食べものの生産から廃棄までの食行動においてどの段階の食行動が研究されているのであろうか。食行動を、①生産・入手・流通などの入手段階、②貯蔵・調理加工・献立作成などの調製段階、③膳立てや喫食などの喫食段階、④片付け、ごみ処理などの廃棄段階の四つに区分して集計した結果を、図2に示した。図では、①より④を、それぞれ、①入手、②調製、③喫食、④廃棄と略し、それらを『家政誌』の報文で多い順に並べ直して示してある。

## 『日本家政学会誌』における食文化関連論文の分析

図より、研究された食行動は報文、資料、『風俗』、『生活学』で傾向が若干異なるが、いずれも調製段階の食行動に関する論文の割合が高く、廃棄段階の食行動に関する論文の割合が低かった。

以上のことから、『家政誌』の報文と資料は、『風俗』、『生活学』と同様に、①食行動に関して、②その食行動の中で、貯蔵・調理加工・献立作成など、調製段階の食行動に関して多く研究され、③片付け・ごみ処理など、廃棄段階の食行動に関してほとんど研究されていないことが明らかになった。

近年、環境保全は地球規模で取り組まねばならない課題とされている。家政学が生活の向上と人類の福祉に貢献する実践的総合科学（田村 1998）であるならば、食べものの廃棄についても今後研究されねばならないであろう。

## (3) 研究対象

食文化にかかわる研究は、あらゆる時代、地域、階層の食文化が明らかにされる必要がある。さらに、食文化が研究されている時代や地域や階層は、明確な視角で選定される必要がある。以下では、このような観点から食文化が研究された時代、地域、階層と、それらの視角の明確さを検討する。

## 1) 時代

表2に、食文化が研究された時代を示した。なお、研究された時代は、①原始時代、②古代と中世と近世（以下、前近代と略す）、③明治から昭和20年8月15日まで（以下、近代と略す）、④それ以降（以下、現代と略す）の四つに区分した。

表より、3誌の食文化関連論文を合計すると、原始時代に関する論文19編、前近代に関する論文82編、近代に関する論文が45編、現代に関する論文が140編で、現代の食文化に関する論文が多く、原始時代の食文化に関する論文が少なかった。『家政誌』の報文

と資料、『生活学』は現代に関する論文の割合が高く、原始時代に関する論文の割合が低かった。『風俗』は前近代に関する論文の割合が68.4%で高く、他の時代に関する論文の割合は20%前後であった。

食文化研究部会の発足直後において、部会の課題として「食文化の原点ともいべき原始・古代社会における食文化の究明」が提示されている（石川 1988）。しかしながら、食文化研究部会が発足して10年余りが経過した現時点でも、『家政誌』において原始時代の食文化が研究対象とされた論文は皆無であった。

以上のことから、①『家政誌』、特に報文は現代の食文化に関する論文の割合が高く、②報文も資料も原始時代の食文化に関する論文が皆無であり、③近代に関する論文の割合が低かった。したがって、④今後、研究対象としての時代が拡大されること、特に原始時代や近代の食文化について究明されることが課題であろう。

## 2) 地域

表3に、食文化が研究された地域を示した。なお、ここでの地域は、まず①国外と国内に分け、国内をさらに②都市、③農山村、④漁村と、⑤いずれにも属さない区分不能の五つに区分した。

表より、3誌の食文化関連論文を合計すると、40編で国内に関して研究され、国内としては区分不能の論文が95編で最も多く、都市に関する論文が80編で次に多く、漁村に関する論文は21編で少なかった。『家政誌』の報文は国内に関する論文のみで、国内としては都市に関する論文の割合が高かった。資料は、国外の食文化に関する論文もあるが、すべての論文で国内の食文化に関して研究され、国内としては都市にも農山村にも漁村にも区分できない、つまり日本の食文化についての研究ではあるが地域を特定できない論文の割合が高かった。『風俗』は国内に関する論文の

表2. 食文化が研究された時代

学会誌	論文の種類	食文化関連論文	原始時代	前近代	近代	現代
家政誌 (編 (%))	報文	81(100.0)	—	15(18.5)	8(9.9)	69(85.2)
	資料	32(100.0)	—	11(34.4)	2(6.3)	20(62.5)
	計	113(100.0)	—	26(23.0)	10(8.8)	89(78.8)
風俗 (編 (%))		76(100.0)	17(22.4)	52(68.4)	19(25.0)	14(18.4)
生活学 (編 (%))		41(100.0)	2(4.9)	4(9.8)	16(39.0)	37(90.2)
合計		230(100.0)	19(8.3)	82(35.7)	45(19.6)	140(60.9)

—：該当論文なし。

表3. 食文化が研究された地域

学会誌	論文の種類	食文化関連論文	国 外	国 内				
				論文数	都 市	農山村	漁 村	区分不能
家政誌 (編 (%))	報 文	81(100.0)	—	81(100.0)	35(43.2)	16(19.8)	12(14.8)	32(39.5)
	資 料	32(100.0)	3( 9.4)	32(100.0)	9(28.1)	5(15.6)	—	18(56.3)
	計	113(100.0)	3( 2.7)	113(100.0)	44(38.9)	21(18.6)	12(10.6)	50(44.2)
風 俗 (編 (%))		76(100.0)	26(34.2)	62( 81.5)	27(35.5)	7( 9.2)	2( 2.6)	29(38.2)
生活学 (編 (%))		41(100.0)	11(26.8)	33( 80.5)	9(21.9)	5(11.9)	7(17.1)	16(39.0)
合 計		230(100.0)	40(17.4)	208( 90.4)	80(34.8)	33(14.3)	21( 9.1)	95(41.3)

—: 該当論文なし.

割合が高かったが、国外の食文化に関する論文も34.2%あり、国内として区分不能と都市に関する論文の割合が高かった。『生活学』は『風俗』と傾向が類似し、国内に関する論文の割合が高かったが、国外に関する論文も26.8%あり、国内として区分不能の論文の割合が最も高く、次に都市に関する論文の割合が高かった。なお、国外は、『家政誌』がすべてアジア、『風俗』がアジア19編、北米7編、中東1編、『生活学』がアジア3編、北米4編、南米とマイクロネシア各1編、区分不能2編であった。そして、『家政誌』も『風俗』も『生活学』も、ほとんどがアジアは中国、北米はアメリカ合衆国であった。

食文化研究部会が発足した当時、研究対象の地域に関して、「欧米先進諸国はもちろん、アジア・アフリカ諸国・諸地域の食文化についても、研究の手を広げる」必要性が提言されている(石川1988)。表3の『家政誌』における国外はⅣ期に発表された論文であることから、研究対象としての地域に関するこの提言も、時代に関する提言と同様に、未だ実現されていないといえる。このことと、『風俗』、『生活学』で、国外が中国やアメリカ合衆国に偏在していることから、国外、特に中国やアメリカ合衆国以外の国々の食文化に関する研究は、食文化研究に携わる者にとって、今後の課題といえよう。

以上のことから、『家政誌』は、①国内の都市の食文化に関する論文の割合が高く、②国内の漁村や農山村、それに国外の食文化に関する論文の割合が低く、③報文は国外、資料は漁村に関する論文が皆無であった。したがって、④今後、研究対象としての地域が拡大されること、つまり国外、それに国内の漁村や農山村の食文化に関する研究も取り込まねばなる

まい。

### 3) 階 層

表4に、食文化が研究された階層を示した。なお、ここでの階層は、①上層、②中層、③下層と、④これらのいずれに属するか判定しがたい区分不能の四つに区分した。

階層の区分や基準をどう設定するかについてさまざまに考えられる。本研究は、①たとえば「農業を中心とした中堅層の…(石垣等1973)」のように、本文中に階層が示唆される記載がある場合、それを尊重し、②記載されてない場合、各時代における社会的な立場から位置づけることとした。記載されてない場合の区分を論文中の表記で具体的に示すならば、たとえば、①上層は、天皇家、公家、貴族、将軍家、大名、平安時代の僧侶(伊藤1974a)、江戸時代の幕吏(川田1964)、明治時代の工学博士や医学博士(山口1980)など、②中層は、古墳時代から平安時代の庶民(鈴木1982)、鎌倉時代から室町時代前期における鍛冶職人(梅川1994)、室町時代の武士(伊藤1974b)、江戸時代の下級武士や町人(長尾1974)、明治時代のミドルクラス(小野1980)、昭和30年頃の生活改善農家(鷹觜1958)、昭和30年代末の恵まれた給与生活者(楠屋1965)など、③下層は、鎌倉時代から室町時代前期における乞食(梅川1994)、1977年において年収が全国平均の1/4程度の離島民(磯田と足立1980)などである。このように区分すると、大半の人々が中層に位置づけられ、上層と下層に位置づけられる人々は少数となる。それにもかかわらず、このように区分したのは、一般大衆的な人々とそうでない人々に2分し、一般大衆的でない人々をさらに上と下の階層に分けて検討したいと考えたからである。

## 『日本家政学会誌』における食文化関連論文の分析

表4. 食文化が研究された階層

学会誌	論文の種類	食文化関連論文	上層	中層	下層	区分不能
家政誌 (編 (%))	報文	81(100.0)	13(16.0)	64(79.0)	1( 1.2)	10(12.3)
	資料	32(100.0)	7(21.9)	22(68.9)	—	7(21.9)
	計	113(100.0)	20(17.7)	86(76.1)	1( 0.9)	17(15.0)
風俗 (編 (%))		76(100.0)	38(50.0)	29(38.2)	6( 7.9)	22(28.9)
生活学 (編 (%))		41(100.0)	4( 9.8)	33(80.5)	5(12.2)	5(12.2)
合計		230(100.0)	62(27.0)	148(64.3)	12( 5.2)	44(19.1)

—: 該当論文なし.

表4より, 3誌の食文化関連論文を合計すると, 中層に関する論文が148編と多く, 下層に関する論文が12編と少なかった. 報文, 資料, および『生活学』は中層に関する論文の割合が80%前後で高く, 報文と資料は下層に関する論文が僅少あるいは皆無であった. これに対し, 『風俗』は上層に関する論文が半数で最も多く, それに次いで中層に関する論文も40%弱見出された.

先に述べたように, 本研究における階層区分は均等分割でなく, 中層に位置づけられる人々が多く, 上層と下層に位置づけられる人々が少なくなっている. そのため, 中層に関する論文の割合が高く, 上層や下層に関する論文の割合が低い結果になると予測される. しかしながら, 下層の食文化に関して研究された論文が, 3誌の食文化関連論文を合計しても少なく, 特に『家政誌』では皆無に近かった. 先に述べたように, 食文化にかかわる研究はあらゆる階層について取り組まれる必要があることから, この状況は注視されねばならないであろう. 今後の課題である.

以上のことから, 『家政誌』は, ①中層の食文化に関する論文の割合が高く, ②下層の食文化に関する論文の割合が低く, ③その傾向は報文より資料に見出されるようである. これらのことから, ④今後, 研究対象として階層が拡大されること, 特に下層の食文化に関して研究される必要があると言えよう.

## 4) 視角の明確さ

図3と図4に, 対象としての時代, 地域, 階層が選定された際の視角の明確さについて分析した結果を示した.

図3より, 報文, 資料, 『風俗』, および『生活学』のいずれも, 時代に関して視角の明確な論文の割合が高く, 階層に関して明確な論文の割合が低かった.

時代, 地域, 階層のそれぞれについて, 報文, 資料,

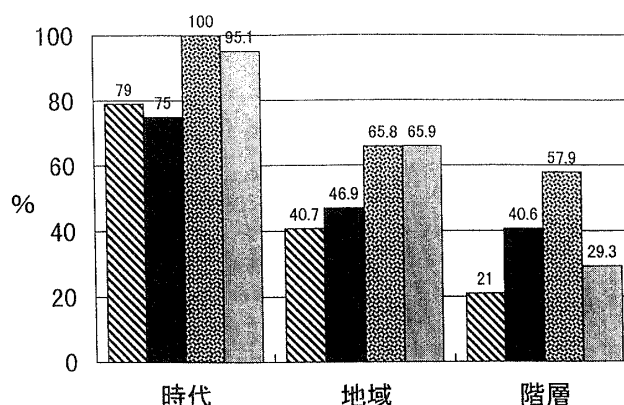


図3. 視角の明確な論文

▨: 家政誌報文, ■: 家政誌資料, ▩: 風俗, ▤: 生活学.

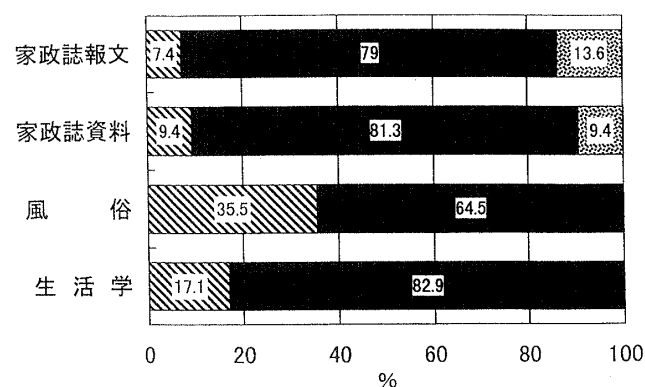


図4. 視角の明確さ

▨: いずれも明確, ■: いずれか明確, ▩: いずれも不明確.

『風俗』, 『生活学』を比べると, 視角が明確な論文の割合は, 時代に関して『風俗』が高く ( $p < 0.01$ ), 『家政誌』の報文と資料が低かった (それぞれ,  $p < 0.01$ ,  $p < 0.05$ ). 地域に関しては, 『風俗』が高く ( $p < 0.05$ ), 『家政誌』の報文が低かった ( $p < 0.01$ ). 階層に関しては, 『風俗』が高く『家政誌』の報文が低かった ( $p < 0.01$ ). なお, 『家政誌』の報文と資料

を比べると、時代と地域に関して有意差がなく、階層に関して資料が高く、報文が低かった ( $p < 0.05$ ).

また、図表として示していないが、『家政誌』と『風俗』と『生活学』を比べると、明確な論文の割合は、時代に関しても、地域に関しても、階層に関しても、『風俗』が高く『家政誌』が低かった ( $p < 0.01$ ).

図4より、対象に関する視角がいずれも明確な論文の割合は『風俗』が高く報文が低く、いずれも不明確な論文は『風俗』が低く報文が高かった ( $p < 0.01$ ). なお、報文と資料間で有意差は認められなかった. また、『家政誌』と『風俗』と『生活学』を比べると、いずれも明確な論文の割合は『風俗』が高く『家政誌』が低く、いずれか不明確な論文は『風俗』が高く『家政誌』が低かった ( $p < 0.01$ ).

以上のことから、『家政誌』は、①時代に関して地域や階層より明確な視角で研究対象が選定されているが、②『風俗』や『生活学』に比べ、時代に関しても、地域に関しても、階層に関しても、研究対象として明確な視角で選定されているとは言いがたく、③階層に関して報文は資料より視角が明確でないと言える.

『家政誌』においても、研究された対象は、論文執筆者の問題意識にもとづいて選定されているはずである. 著者の印象として、『風俗』や『生活学』に比べ、その問題意識が明記されていないか、もしくは極めて読みとりにくかった. そのため、図3と図4に示したように、『家政誌』は、『風俗』や『生活学』に比べ、明確な視角で対象が選定された論文の割合が低かったのかもしれない. 研究対象としてその地域や時代や階層を選定した理由や意味づけ、研究対象に関する問題意識など、つまり対象を選定した視角は、研究者がその研究に向きあった姿勢が反映されていると言える. それだけに、今後、『家政誌』においても明確な視角で対象が選定されること、あるいは明確な視角で対象が選定されていることが読みとれる記述が課題であろう.

#### (4) 研究手法

食文化は、主として、①考古学的あるいは民俗学的な遺物資料や、②古文書や統計書などの文字資料にもとづいたり、③アンケートや聞き取りなどの調査によって研究される(石毛 1985; 市毛 1986; 石川 1995). ここでは、研究手法をそれらに、④観察調査と、⑤いずれにも属さない手法によった場合に区分して検討した. 具体的には、①遺物資料、②古文書、

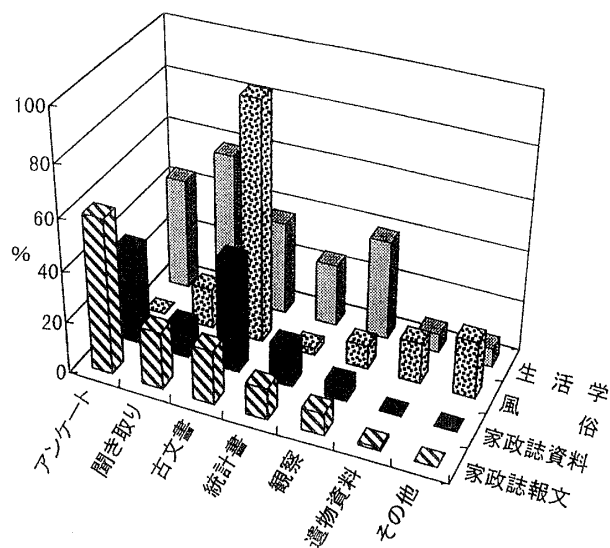


図5. 研究手法

■：家政誌報文，■：家政誌資料，□：風俗，■：生活学.

③統計書、④アンケート、⑤聞き取り、⑥観察、⑦その他の計七つに区分して集計した. 図5に、その結果を示した. なお、図では、それらの研究手法を『家政誌』の報文で多い順に並び替えて示してある.

図より、報文はアンケート調査、『風俗』は古文書で研究された論文の割合がそれぞれ60.5%、93.4%で高く、報文は遺物資料あるいはその他、『風俗』はアンケートあるいは統計書で研究された論文の割合が皆無に近かった. 資料は古文書あるいはアンケートの論文の割合がそれぞれ43.8%と37.5%で高く、遺物資料あるいはその他の論文の割合が報文と同様に皆無に近かった. 『生活学』は、聞き取り、アンケート、観察、古文書、統計書の論文の割合が24.4~58.5%で、遺物資料あるいはその他の論文の割合7.3%であった. これらの結果から、研究手法の様相は、報文と『風俗』で両極を、資料と『生活学』はその中間を呈していると言える. 風俗史学会は「人々の生活文化の表現である風俗を歴史的に研究する」学会であることから、古文書を用いた論文の割合が高かったのは頷首できよう. 先に述べたように、家政学会の食文化研究部会は食物史のゼミが母体となって発足した. しかし、『家政誌』の報文は古文書で研究された論文の割合が低かった. このことから、食文化研究部会の母体で取り組まれた成果が『家政誌』の報文に反映されているとは言いがたいのではなからうか.

ところで、図5の各研究手法にはそれぞれ次のような特徴と限界がある.

## 『日本家政学会誌』における食文化関連論文の分析

考古学的あるいは民俗学的な遺物資料を用いる手法は極めて古い時代からの食文化の解明に有効である。しかし、遺されている資料が少なく、遺されていても厨房施設や食器・食具など、資料の種類が限られている(石川 1995)。また、近年、極めて古い時代における食事内容が糞中の成分分析によって確定されたり(金原 1998)、水田か焼畑かがプラントオパール分析によって確定されている(佐原 1984)。これらも遺物資料が用いられて食文化が明らかにされた研究と言える。しかし、これらの手法は分析技術と施設設備が必要であることから、食文化研究者にとって現時点では隔壁の感の強い手法と言えよう。

古文書を用いる手法は、古代から現在にいたるまでの幅広い時代の食文化の解明に有効である。しかし、古文書に記されている食文化は、文字を使用していた人々の、主としてハレ食に関してである。文字文化に無縁な階層の、しかも日常食に関する記録は極めて少なく、入手しがたい(石川 1995)。

統計書を用いる手法は、入手できたデータを統計的に処理することで科学的分析が可能である。しかし、統計的データが有する限界のため、つまり統計の対象とされた地域、時代、階層が限られていることから、分析対象となりうる地域、時代、階層に一定の限界がある。

聞き取り調査は、さまざまな階層の食文化が臨場感を伴って明らかにできるが、調査できる時代に限りがある。それは、調査対象者の年齢や性などによって、調査可能な時代が限られ、現時点でせいぜい明治の終わりか大正の初め以降であると思われるからである。また、聞き取り調査は、調査対象者との人間関係によって結果に微妙な差異が生じる可能性がある。さらに、1事例の調査にかなりの時間が必要なため、事例数の拡大に限度がある。

アンケート調査は、比較的短時間で広い地域において多くの事例が調査でき、さらに統計的な処理によって科学的分析が可能である。しかし、聞き取り調査と同様に調査可能な時代が制限される。さらに、文字を媒体としているので、調査対象者が読み書きに不自由していない、つまり一定の学力を保有した人々に限られる。わが国の識字率は諸外国に比べて高いが、現在でも読み書きに不自由な人々が少数ではあるが存在している(小沢 1994)。このことを勘案すると、対象となりうる人々に一定の限界がある。

観察調査は、直接に対象を観察してデータを入手す

ることから、調査できる地域や階層に限界がないし、さらにその場で生じた新たな疑問も解明できて内容的に掘り下げた研究が可能である。しかし、直接に調査するため、調査できる時代が現時点に限られる。同時に、聞き取り調査と同様に、対面しての調査だけに関係者との人間関係が結果に影響を与える可能性がある。また、1事例の調査にある程度の時間が必要なため、事例数の拡大に限度がある。

以上のことを勘案すると、研究手法は研究対象としてどのような時代、地域、階層を選定するかによって規定されると言える。たとえば、現代における中層の食文化を明らかにしようとするならばアンケートか聞き取りか観察、前近代における上層か中層の食文化ならば古文書となろう。また、上層や下層という限られた人々の食文化だと聞き取り、原始時代における食文化だと遺物資料に頼らざるを得ないであろう。さらに、国外の食文化で、時代が現代なら観察か聞き取りかアンケート、古い時代なら古文書か聞き取り、隔絶された漁村や農山村の食文化なら、対象とする時代によって異なるが観察か聞き取りとなろう。

研究対象と研究手法におけるこのような関係は、本研究においても概観されるように思われる。具体的に列挙するならば、現代や中層に関して研究された論文の割合が高かった報文は、アンケート調査による論文の割合が高かった。前近代に関して研究された論文の割合が報文に比べて高かった資料は、報文より古文書による論文の割合が、他の手法に比べて、また報文、資料、『生活学』に比べて高かった。前近代や上層に関する論文の割合が高かった『風俗』は、古文書による論文の割合が特に高かった。そして、原始時代に関して研究されていた論文が見出された『風俗』と『生活学』で遺物資料が用いられており、論文が皆無であった報文と資料で遺物資料による論文の割合は皆無に近かった。さらに、事例的に見ても、『風俗』において国外が研究されていた論文では古文書、『生活学』において国外が研究されていた論文では観察や聞き取りが用いられていた。

これらのことから、報文、資料、『風俗』、『生活学』では、それぞれ独特の対象が選定されてその対象にふさわしい手法で研究されていると言える。このことは、報文、資料、『風俗』、『生活学』の食文化研究が、研究対象と手法に関してそれぞれ独自の特徴を有していることを意味している。そして、このことは、食文化の研究者にとって、各自の論文の投稿先を決定する際

表 5. 統計的な処理

学会誌	論文の種類	食文化関連論文	統計的な処理		
			論文数	有意差検定	多変量解析
家政誌 (編 (%))	報 文	81(100.0)	34(42.0)**	29(35.8)	7( 8.6)
	資 料	32(100.0)	10(31.3)	10(31.3)	—
	計	113(100.0)	44(38.9)	39(34.5)	7( 6.2)
風 俗 (編 (%))		76(100.0)	—**	—	—
生活学 (編 (%))		41(100.0)	9(22.0)	5(12.2)	8(19.5)
合 計		230(100.0)	53(23.0)	44(19.1)	15( 6.5)

—：該当論文なし。\* $p < 0.05$ , \*\* $p < 0.01$ , 自由度：3。統計処理あり：有意差検定や多変量解析などの処理がなされた論文。有意差検定： $\chi^2$ 検定,  $t$ 検定,  $F$ 検定など。多変量解析：因子分析, クラスタ分析など。

の情報となろう。しかし、人間の生活の向上と人類の福祉に貢献することが実践的総合的の科学である家政学会の責務（田村 1998）と考えるならば、『家政誌』における食文化関連論文は、『風俗』、『生活学』の特徴も包含された研究へ飛躍を遂げる必要があるように思われる。つまり、家政学会でも遺物資料、聞き取り、古文書などの手法が用いられた研究が取り組まれ、時代として原始時代と近代、地域として国外と漁村、階層として下層を対象とした論文が『家政誌』にも掲載されねばなるまい。

ところで、研究手法を問題にする場合、統計的な処理の有無も検討されねばなるまい。表5に、有意差検定や多変量解析などの統計的な処理の有無を示した。なお、有意差検定とは $\chi^2$ 検定,  $t$ 検定,  $F$ 検定など、多変量解析とは因子分析, クラスタ分析などが行われた場合とした。

表5より、統計的処理論文の割合は『家政誌』の報文に高く、『風俗』に低かった ( $p < 0.01$ )。『家政誌』の報文と資料間に有意差は認められなかった。また、統計的な処理として、『家政誌』の報文と資料は有意差検定がされた論文が30%強で、『生活学』は多変量解析がされた論文が19.5%、有意差検定がされた論文が12.3%であった。

先に示したように、『風俗』は、古文書によって研究された論文が他の手法によって研究された論文に比し、特に多かった。つまり、『風俗』において、食文化は古文書を用いて事例的に研究されている傾向にあると言える。そのため、表5に示されたように、統計的処理論文は皆無となったのであろう。一方、資料に

おいても、古文書によって研究された論文の割合が高かった。同時に、資料では、アンケートによって研究された論文も、古文書と同程度の割合であった。このためであろう、資料における統計的処理論文の割合は有意ではなかったが、報文より低い値であった。

佐藤 (1991) は、『家政誌』において、家政学原論の論文の割合が他領域に比べ報文に低く資料に高いことについて、『家政誌』における論文審査と、投稿する研究者の意識の両面に問題があると指摘している。そして、その理由を、家政学原論の論文で、実験や検査、調査、統計などの科学的といえる手法が用いられず、文献資料が用いられ、哲学的論理展開によって書かれている点をあげている。つまり、①社会学的手法で研究された家政学原論の論文は報文として掲載されにくいといった論文審査上の問題と、②報文として掲載されにくいことを予測し、はじめから資料として投稿する研究者の取り組み上の問題があると、指摘しているのである（佐藤 1991）。『家政誌』の食文化研究における研究手法を、①佐藤のいう調査と文献資料という観点からみると、文献による論文の割合は資料に、アンケート調査による論文の割合は報文に高かった。②統計的処理という観点からみると、統計的処理論文の割合は報文に高く資料に低い傾向がうかがわれた。したがって、食文化の分野に関しても、佐藤の指摘のような問題が存在していると言えるのではなかろうか。

さて、古文書や聞き取りや観察で食文化が研究されると、その事例の食文化が質的に把握され、さらに事例が重ねられることでデータへの信頼性が増して、そ

## 『日本家政学会誌』における食文化関連論文の分析

の事例だけの食文化としてでなく普遍的な食文化として提示される。アンケートや統計書などある集団の食文化が量的に把握され、さらに統計的に処理されることでデータへの信頼性が保障され、その集団の食文化としてでなく普遍的な食文化として提示される。つまり、古文書や聞き取りや観察などによる事例的研究は質的手法、アンケートや統計書と統計的な処理の組合せは量的手法であり、前者は質的側面から、後者は量的側面から、食文化の究明が目ざされる。先に述べたように、『家政誌』、特に報文は、『風俗』や『生活学』に比べて、①アンケートによる論文の割合が高く、②古文書、聞き取り、観察などによる論文の割合が低く、③統計的処理論文の割合が若干ではあるが高いことから、『風俗』や『生活学』より量的側面から食文化が明らかにされている傾向にあると言えるようである。この点も、先に述べた研究対象、研究手法と同様に、『家政誌』の食文化関連論文の特徴と言えよう。しかし、両方向から研究が進められることで、『家政誌』の食文化研究はより充実されるであろうと考えると、今後、質的手法による食文化研究も取り込まれねばなるまい。

なお、本研究は、『家政誌』の掲載論文で家政学会における食文化研究の動向を検討した。家政学会の食文化研究の動向をよりいっそう明らかにするため、家政学会大会、あるいは食文化研究部会研究大会における口頭発表についての検討が必要であろう。また、風俗史学会、生活学会以外の学会における食文化研究についても検討し、食文化研究の動向をよりいっそう明らかにする必要がある。今後、検討したい。

## 4. 要 約

『家政誌』における食文化研究の特徴と課題を探るために、「人間が自然や社会に対処しながら蓄積し、蓄積している食に関する行動様式の総体」にかかわる研究が行われたと思われる論文を取り出し、論文数、研究の内容、対象、および手法を検討した。比較のために、食生活にかかわる研究がなされている他の学会誌として、『風俗』および『生活学』に掲載された食文化関連論文についても検討した。食文化関連論文として取り出された、『家政誌』115編（報文81編、資料32編、ノート2編）、『生活学』41編、『風俗』76編から家政誌のノート2編を省いた230編を分析対象論文とした。その結果、次のことが明らかとなった。

(1) 『家政誌』は、『風俗』や『生活学』に比べ、食

文化にかかわる論文の割合が低かった。また、資料として掲載されている論文の割合が高かった。

(2) 『家政誌』の食文化関連論文は、『風俗』や『生活学』と同様に、貯蔵・調理加工・献立作成など、調製の段階にかかわる食行動が研究されている論文の割合が高いという特徴が明らかとなった。

(3) 『家政誌』の食文化関連論文は、時代として現代、地域として国内の都市、階層として中層に関する食文化が研究されている論文の割合が高いという特徴が明らかとなった。また、研究対象とされた時代や地域や階層が選定される際、視角が不明確な傾向にあった。

(4) 『家政誌』は、他の2誌に比べ、アンケート調査が行われたり、統計的に処理された論文の割合が高いという特徴が明らかとなった。この傾向は、特に報文に見出された。このことから、『家政誌』、特に報文では、食文化が質的手法によってでなく、量的手法によって明らかにされている論文が多い傾向にあることが示唆された。

上記の結果から、『家政誌』における今後の食文化研究の課題として、以下の点が示唆されたと言えよう。

(1) 時代として前近代や近代、地域として国外や国内の漁村、および階層として下層など、食文化の研究対象が拡大されるとともに、明確な視角で選定されること。

(2) アンケート調査と統計的処理を組み合わせた量的手法だけでなく、古文書や遺物資料を用いた研究、および聞き取り調査、観察調査などが用いられた事例的研究による質的手法も取り入れられることによって事例的な研究も導入されること。

(3) それによって、食文化にかかわる研究が他分野と比肩できるように活性化されること。

本研究は平成7年度日本家政学会第47回大会（奈良女子大学）で報告した内容をさらに発展させて、平成8年度日本家政学会食文化研究部会第9回研究大会（日本女子大学）、および平成9年度日本家政学会第49回大会（共立女子大学）で報告した。

## 引用文献

- 市毛弘子 (1986) 索餅の起源と用いられ方、および索餅から索麺への変遷過程 (第1報), 家政誌, **37**, 453-463  
 今井悦子 (1996) 食の文化—歴史学的・比較論的アプローチ—, 『衣・食・住の科学』(酒井豊子, 本間博文編),

- 放送大学教育振興会, 東京, 32
- 稲垣長典 (1979) 回顧と展望, 栄養・食品学, 家政誌, **30**, 19-22
- 石垣志津子, 山口久子, 森川きく, 武藤富美子 (1973) 農家主婦の健康・家政管理に関する調査研究 (第1報), 家政誌, **24**, 409-417
- 石毛直道 (1981) 『東アジアの食の文化』, 平凡社, 東京, 38
- 石毛直道 (1982) 『食事の文明論』, 中央公論社, 東京, 2
- 石毛直道 (1985) 『論集 東アジアの食事文化』, 平凡社, 東京, 39
- 石毛直道 (1989) 『昭和の食』, ドメス出版, 東京, 163
- 石川寛子 (1995) 食生活の変遷を学ぶ, 『食生活の成立と展開』 (石川寛子編), 放送大学教育振興会, 東京, 14, 157-158
- 石川寛子 (1998) 学会活動の回顧と展望, 食文化研究部会, 家政誌, **49**, 559-562
- 石川松太郎 (1988) 学会活動の回顧と展望, 食文化研究部会, 家政誌, **39**, 482-484
- 磯田厚子, 足立己幸 (1980) 加工食品使用につながる食情報接触行動について, 生活学, **6**, 127-151
- 伊藤うめの (1974 a) 葉茶の飲用の歴史 (第二報), 風俗, **12** (4), 40-64
- 伊藤うめの (1974 b) 葉茶の飲用の歴史 (第三報), 風俗, **13** (1), 48-74
- 金原正明 (1998) 便所遺構から探る古代人の食生活, *Vesta*, **31**, 11-18
- 加藤浩文 (1998) 家政学の魅力一人, 環境, 学問のつなぎ手一, 家政誌, **49**, 609-612
- 川田貞夫 (1964) 江戸時代後期における1幕吏の生活, 風俗, **4** (4), 11-20
- 川端晶子 (1998) 食物学, 家政誌, **49**, 587-591
- 楠屋美津代 (1965) 兵庫県西宮北口団地における食物調査, 家政誌, **16**, 203-207
- 長尾幸子 (1974) 西鶴文学における近世上方町人の食事知識と食生活, 風俗, **13** (1), 48-74
- 小野一成 (1980) 「中等社会」の日常生活, 風俗, **18** (3/4), 33-46
- 大野静枝 (1998) 発刊にあたって, 『日本人の生活』 (日本家政学会編), 建帛社, 東京
- 小沢有作 (1994) 『物知り教育から解放教育へ』, 明石出版, 東京, 23-30
- 佐原 真 (1984) 『日本の風土と食』, ドメス出版, 東京, 41-51
- 佐藤真弓 (1991) 『家政学雑誌』における報文数および報文内容分析, 家政誌, **42**, 937-948
- 篠原弘章 (1989) 『行動科学のBASIC 第5巻 ノンパラメトリック法』, ナカニシヤ出版, 京都, 18-29
- 杉田浩一 (1985) 『調理の文化』, ドメス出版, 東京, 153
- 杉田浩一 (1988) 家政学研究の推移・動向 (1979~1987) 食物学, 家政誌, **39**, 517-521
- 鈴木解雄 (1982) 遺跡と文書にみる古代の厨, 風俗, **21** (1), 11-18
- 鷹薮テル (1958) 食慣行の生態調査 (第2報), 家政誌, **9**, 110-118
- 田村照子 (1998) 刊行にあたって, 『日本人の生活』 (日本家政学会編), 建帛社, 東京
- 田辺義一 (1979) 回顧と展望, 家政学原論, 家政誌, **30**, 11
- 豊川裕之 (1984) 『日本の食文化 食の構造』, 全国食糧振興会, 東京, 158
- 梅川光隆 (1994) 中世京都の採暖・炊事の炉, 風俗, **32** (3), 2-61
- 山口昌伴 (1980) 台所空間の変遷, 生活学, **6**, 183-220
- 米川五郎, 馬路泰蔵 (1990) 『食生活論』, 有斐閣, 東京, 30